

『から騒ぎ』を読み直す  
(2023年度文学部英文学科公開講義「いま、古典を  
読むこと」Proceedings)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福土, 航 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000137">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000137</a>

## 『から騒ぎ』を読み直す

福 士 航

本講義では、ウィリアム・シェイクスピアの『から騒ぎ』(*Much Ado about Nothing*)を、劇タイトルに含まれる‘nothing’の意味作用を読み解くことを中心に、劇の言語に焦点を当てて読み直した。シェイクスピアの劇作品のような古典を現代において読み直す、読み継いでいくことの意義と、自分なりの古典解釈を紡いでいくことの重要性を、梨木香歩と斎藤幸平の言葉を引用し、講義冒頭で確認した。その後は本講義の元となっている拙論「Noting Nothing — *Much Ado About Nothing* の言語」の議論を中心に、論文で論じきれなかった課題も含めて講義した。以下は当日のハンドアウトである。拙論と合わせてご覧いただきたい。

### 0. はじめに・・・いま、古典を読む意義

一つの読みだけが正しいということはなく、本作に限らず物語というものは、きっと、さまざまな読みを排除することなく、それらを響き合わせる求心力を持つことによって、自らその奥行きを穿っていくものなのでしよう。

そういう共振音を内在させる物語こそが、人の心をその深みで捉え、きっといつまでも読み継がれていくものなのだと思います。(梨木香歩『物語のものがたり』p.5)

例えば、マルクスは技術を素朴に賛美していたわけでもない一方で、頭ごなしに拒絶していたわけでもありません。この両義性をどのように解釈するかで、マルクスの思想は違った一面を見せるし、それに合わせて、将来社会の構想も変化します。だから、古典は面白い。今でも私たち自身の問題意識を映し出す鏡として、『資本論』は何度も違った視点から読み直す価値があるのです。(斎藤幸平『ゼロからの「資本論」』 p. 236)

### 1. William Shakespeare, *Much Ado about Nothing*

Benedick-----Beatrice	“a kind of merry war” (1.1.57-58)
Claudio-----Hero	“die to live” (4.1.253)
Don John, Borachio, Conrade	villains
Dogberry	Mr. malapropism
Leonato	Hero’s father, Governor of Messina
Don Pedro	Prince of Arragon

### 2. nothing/noting

DON PEDRO. Nay, pray thee, come,  
Or if thou wilt hold longer argument,  
Do it in notes.

BALTHASAR. Note this before my notes:

There’s not a note of mine that’s worth the noting.

DON PEDRO. Why, these are very crotchets that he speaks.

Note notes forsooth, and nothing! (2.3.50-55.)

『から騒ぎ』を読み直す

当時の発音で同音異義語: nothing/noting, note/naught

⇒劇タイトル *Much Ado about Nothing* は, much ado about nothing/noting と読める

⇒ nothing/noting についての大騒ぎ・・・nothing/noting とは何だ?

⇒福士仮説: それは言語ではないか?

⇒*Much Ado* は, 自らが用いている言語の特徴に自覚的な, 極めて自己言及的なテキスト

### 3. シェイクスピアの言語観

“Foul words is but foul wind, and foul wind is but foul breath, and foul breath is noisome, therefore I will depart unkissed.” (5.2.49-51)

“What is honour? A word. What is in that word ‘honour’? What is that ‘honour’? Air.” (1 *Henry IV* 5.1.133-35)

⇒本質的にはただの無意味な音 (nothing) が意味作用 (denoting) としての noting と表裏一体であるというパラドキシカルな象徴体系が言語である, という言語観

### 4. キャラクター造形に援用される言語への関心

Claudio について

“He was wont to speak plain and to the purpose, like an honest man and a soldier, and now is he turned ortography; his words are a very fantastical banquet, just so many strange dishes.” (2.3.18-21)

⇒発音と書字の不一致への関心, 劇タイトルにすでに内包されている

『から騒ぎ』を読み直す

⇒ Claudio の内面と外面とが齟齬をきたしていることを指摘する際に、本劇は言語への関心と接近している

Beatrice について

“I never yet saw man — / How wise, how noble, young, how rarely featured — / But she [Beatrice] would spell him backward.” (3.1.59-61)

⇒ジェンダー規範を攪乱するキャラクターである Beatrice, 彼女の特徴として「後ろから書く」すなわち「正しく書かない人」であるという書き方

⇒テキストが示す言語的特質への関心がキャラクター造形のレベルでも作用していることを示す

⇒恋人 Benedick の名前を「正しく読まない・書かない」とされる Beatrice が、後述するとおり Benedick に宛てたソネットを書くまでに至るのが Beatrice-Benedick プロットの骨格であることを考えると、言語への関心はプロットのレベルでも見出される

## 5. 矛盾形容 oxymoron の多用

“a kind of merry war” (1.1.57-58)

“die to live” (4.1.253)

⇒喜劇的要素と悲劇的要素の並置

⇒常に nothing/noting の矛盾形容的二重性が響くテキストにおいて、プロット構成にもその二重性は底流している

⇒本質的には無価値の取るに足らない噂話から生じた恋心に気づくのが Beatrice と Benedick のプロットだとすると、悪意から生まれた根も葉も

『から騒ぎ』を読み直す

ない作り話に翻弄されつつも、最終的にその嘘に気づくのが Hero と Claudio のプロット

## 6. 自己言及的な言語使用

書き言葉としての noting

⇒なんでもない噂話によって破壊されてしまった Claudio-Hero の縁談と対比されるのが、Benedick と Beatrice がそれぞれに書きとめていたソネットであり、「書かれたテキスト」が2人の結婚を後押しする

⇒“Hang her an epitaph upon her tomb” (5.1.274) 墓碑銘を書き墓に捧げることで Claudio の贖罪が果たされる

Dogberry

“O, that I had been writ down an ass!” (4.2.88)

「俺が馬鹿だと書き留めてくれたらよかったのに！」⇒実際には書き留められない

Conrade や Borachio の罪状は、Sexton が “I will go before and show him their examination.” (4.2.67-68) と述べている箇所に明らかなように、公式な書類として書き留められる

malapropism と neologism

*Much Ado* が *OED* で初出と記載のある言葉: “employer” (5.2.31) と “negotiate” (2.1.163)

[L (negotium business (neg- not, otium leisure))] (『リーダーズ+プラス V2』より語源)

*OED* negotiate 1. *Intr.* a. To hold communication or conference (*with* another) for the purpose of arranging some matter by mutual agreement; to

discuss a matter with a view to some settlement or compromise. 1599.  
Shakes. *Much Ado* II.i.185 Let euerie eye netotiate for itselpe, And trust no  
Agent.

“vagrom” (3.3.25)

(“you shall comprehend [apprehend] all vagrom [vagrant] men.” (3.3.25))

初出 1599

1863 George Augustus Sala, *Strange Adventures of Captain Dangerous* に  
おいてもういちどエントリー 「浮浪者・犯罪者」の意味

⇒ここから 20 年程度同様の使用例あり

⇒一定数使用者がいれば誤用も定着するのであり、誤用も言わば正用の  
一部

“Only get the learned writer to set down our excommunication [examina-  
tion] ” (3.5.58-59)

⇒excommunication 「破門」の意味だが、広く言えば「communication」  
からの逸脱

⇒コミュニケーションの内部で用いられつつも、それまでのコミュニ  
ケーションの範疇を超えているのが言葉の誤用・新語の使用

⇒一見するとナンセンスの羅列に見える Dogberry のマラプロピズムは、  
意味作用の契機がナンセンスの中にも胚胎していることを示してもいる

## 7. Hero itself

HERO. O, God defend me, how am I beset!

What kind of catechizing call you this?

『から騒ぎ』を読み直す

CLAUDIO. To make you answer truly to your name.

HERO. Is it not Hero? Who can blot that name

With any just reproach?

CLAUDIO. Marry, that can Hero;

Hero itself can blot out Hero's virtue. (4.1.77-82)

Hero という名前に潜む両義性: 「一途な恋人」「偽りの貞女」⇒ Arden 版の注・Intro 「眼前の女性 Hero」を責めるか, 「Hero という名前」に罪を着せるかの間で揺れ動いている Claudio

⇒音とその表記が一対一で対応しないことが nothing/noting のパラドキシカルな状況を生み出しているように, 「Hero という名前」にも一対一で対応しない含意があるために, 本劇はそのクライマックスにおいて意味の決定不可能な難所を抱え込んでいる

## 8. なんでもないことに気づこう

CLAUDIO. O, what men dare do! What men may do! What men daily do, not knowing what they do!

BENEDICK. How now? Interjections? Why then, some be of laughing, as ha, ha, he. (4.1.17-20)

⇒ William Lilly, *Short Introduction of Latin Grammar* (1538) からの引用 (ha, ha, he)

⇒ “Interjections” (間投詞) という単語が, Claudio の大仰な嘆きの冒頭にある “O” という一語を記述している点は注目

⇒ Claudio の大仰な嘆きと Benedick の喜劇的な発話の対比は, 劇全体に通底する矛盾形容的モチーフの表れの一つ

『から騒ぎ』を読み直す

## 9. noting certainer

**Hero.** And when I lived, I was your other wife:  
And when you loved, you were my other husband.

**Claudio.** Another Hero!

**Hero.** Nothing certainer:

One Hero died defiled, but I do live,  
And surely as I live, I am a maid.

**Don Pedro.** The former Hero! Hero that is dead!

**Leonato.** She died, my lord, but whiles her slander lived. (5.4.60-66)

⇒ 2023 年度の日本英文学会全国大会において、立教大学の冨田岳さんがこの箇所を引用して論じていた「より確かな noting へ」向かっていく、というような論じ方

⇒ Hero プロットにおける Hero の扱いについては、倫理的な批評は一言物申さずにはいられない（が私の論文では一切触れなかった）

⇒ Hero の nothing/noting 解釈は今後の課題

## 引用文献

Shakespeare, William. *Much Ado about Nothing*. Edited by Claire McEachern, The Arden Shakespeare, Third Series, Revised edition, Bloomsbury, 2015.  
斎藤幸平, 『ゼロからの『資本論』』, NHK 出版新書, 2023 年。  
梨木香歩, 『物語のものがたり』, 岩波書店, 2021 年。

本講義の基になっている論文  
富士航「Noting Nothing — *Much Ado About Nothing* の言語」『英文学研究』第 99 巻,  
2022 年, pp. 1-16。